

《研究ノート》

哀れなハインリヒの回心

古澤 ゆう子

ドイツ中世叙事詩人ハルトマン・フォン・アウエの『哀れなハインリヒ』は騎士を主人公にしなが、立派な武器をつけての馬上試合もなければ貴婦人との恋もない。身分の高い貴族の青年の物語でありながら、主要な舞台は田園の農場とサレルノの医師の治療室で、王や貴族の宮廷生活にはほとんど触れられない。この作品の主題は人の生の価値、神と人とのかわりである。人はなにをよすがに生きるのか、神への信仰は人の生き方にかかわるかが問われている。しかし、教訓のみを語って退屈させる道徳書でもなければ、神への信仰のみを説く説教でもない。作者は序文で「憂いを慰め、神を称え、人々に好まれる物語」(十⁽¹⁾十五)を志したと言っている。

男女の主人公が立派すぎて多少、非現実的であるが、これは中世の「騎士物語」の定型であろう。ハルトマンの他の作品の主人公エーレクやイーヴェインも強くて徳の高い理想の騎士、グレゴリーウスは騎士の強さを持つのみならず強い信仰心によって法王に選ばれる人物である。ハルトマンだけではない。ヴ

オルフラム・フォン・エッシェンバッツハの描くバルチヴァールも、ゴットフリート・フォン・シュトラスブルクのトリスタンも、常人はとうていおよびもつかない器量の持主である。作者不詳の『ニーベルンゲンの歌』に登場するジーフリトも同様だと言える。男の主人公のみならず女主人公も、すぐれて美しく心映えのよいことがまずは前提条件である。つまり中世叙事詩の主題となるのはアリストテレスが『詩学』で悲劇について述べるように、⁽³⁾性格も才能も格別優秀な英雄名婦の運命だと言えよう。

そしてこのすぐれた人物たちが、その優秀性にもかかわらず、なんらかのあやまちを犯し不幸に陥り、ある者はあやうくあやまちを正して救われるが、ある者は修復できない破壊に向っていく姿をえがくのがギリシア悲劇である。⁽³⁾この点でも中世叙事詩には類似点が見られる。たとえばエーレクは新婚生活におぼれて騎士の役目を忘れ、イーヴェインは冒険生活にはまりこんで妻への義務を忘れるし、兄妹の結婚から生れたグレゴリーウスは母と結婚してしまう。文武両道欠くことのない才を持つトリスタンは伯父の妻と愛し合い、バルチヴァールは伯父の苦しみに対する問いを怠るといふ間違いを犯す。そして騎士の鑑とたたえられたハインリヒはライ病にかかり乙女の血で治療することを承知してしまう。

このように高貴な出自で眉目秀麗で並外れた能力の持主が、持って生れた才能を用いてただ成功していくのではなく、ふつうの人間と同じようなつまづきを経験するという設定が、読者や聴衆の共感をよび惹きつけるのである。じぶんたちと同じよ

うな間違いやあやまちを犯す主人公を身近に感じて、我身に重ねて主人公の運命に一喜一憂し、さらにみずからの生活を振り返って恐れたり安心したり反省したりする心理状況がうまれるからである。こうした筋書設定自体は、ギリシア悲劇やドイツ中世叙事詩だけでなく、現代の名探偵シリーズやスーパーマンの映画でも、またはコンピュータ・ゲームでも応用されているわけで、文芸作品の一典型と言えよう。しかし、もちろんオリエントポスの神々に呼びかける古代ギリシアの英雄伝説と、キリスト教会を基盤にすえた中世騎士世界と、科学的合理性に信を置く現代には大きな違いがあり、それぞれに興味深い思想的特徴を持つ。さらに作者の目的と考察の深さが、作品の与える感銘の強さや性格に相異をもたらしことは言うまでもない。作者の目的は、たとえ生活の資を得るためであつたとしても、なにかを伝えたることだと考えられる。少なくともハルトマン・フォン・アウエは前述のように、彼の物語が「憂いを慰め、神を称え、人々に好まれる」ことを願つた。多くの人に楽しく読んでもほしいが一時の娯楽ではなく心の慰めとなり、世界と人の創造主にして支配者であるキリスト教の神の力を考える契機とされたいとの願いがこの記述にうかがわれる。そこで「身に備えた才徳に欠けるところがない」優秀有徳の主人公のつまづきがその運命を変えていく有様を、ハルトマンがどう描き何を伝えたか、「哀れなハインリヒ」の回心に焦点をあてて考察を試みる。

二

ハインリヒの回心は二回ある。もともとハインリヒは「高貴な志しと誉れ」を持ち「偽りや卑しさをよせつけない」との誓いを守って「心にいくつもの徳を持つ」「欠点のない」有徳の青年だった(三〇―七四)。定型通りではあるが、身分が高く富裕で優れた才能を持つという三拍子そろった若者にはめづらしく、思いやりもあり誠実で放埒をきらう理想の騎士だったのである。ところがこのハインリヒがライ病にかかり、絶望のどん底で治療の方法を求めて医者を訪ねまわる。しかし有効な治療は、無垢の乙女が自発的にささげようという心臓の血によるもののみであると聞き、治療を断念して財産を処分し農場にひきこもる。これが第一回目の回心と考えられる。

農場には若い娘がいてハインリヒの運命にひどく同情し、自分の血をささげたいと申し出て、父母の嘆きにも固い決心を変えようとしなない。当惑しながらもハインリヒは娘を連れてサレルノの医者のもとへ行くが、いざ心臓を切り取られようとする娘の姿の美しさに気持を変え、治療を中止して帰途につく。これが第二の回心である。騎士と少女、二人の心根を嘉した神の慈悲により、ハインリヒの病はすっかり癒えて、帰国後彼は少女を妻に迎えて幸福な生活を送つたのである。

まず第一の回心から考えると、病はハインリヒに激しい衝撃をあたえた。病は神の天罰とみなす人々から排斥され、親しい人から慰めを得ることもできなかつた。彼は有徳の人で親しい者を保護し友人知人に公平で「完璧な風紀の冠」(六十三)ではあつたが、彼の神への信仰心については言及されていない。「たしなみのある賢い人」(七十四)であつたとされているか

ら、たぶん定められたとおりに教会に通い礼拝に参加はしていたが、それ以上とくに神を心に留めることはなかったのだろう。しかし、神から特別に重い罰を受けるほどの罪をおかしたとは考えなかったから、運命をすなおに受入れる気にはなれなかった。

作者はここで旧約聖書のヨブとハイインリヒを比較している。「善良なヨブは、病も悔りも……忍耐の心で耐え……喜び神を称えた」が「ハイインリヒは、残念ながら、そのようにはせず」悲しみにおぼれたと語っている(一三九―一四八)。しかしながら旧約聖書によれば、ヨブが「主のみ名はほむべきかな」と称えたのは、財産と子供が失われたときであり、彼自身の身に病がふりかかったときではない。「足の裏から頭の頂まで、いやな腫物」におおわれたときヨブは非常に大きな苦しみのなかで「自分の生れた日をのろった」のであり、ハイインリヒが「たびたび自分の誕生の日を呪い嘆いた」(一六〇―一六二)のと同じだった。そして、ヨブがそれでも神を呪うことがなかったと同様、ハイインリヒも神を呪う罪はおかしていない。ただし、ヨブが妻に向かって「われわれは神から幸いをうけるのだから、災いをも、うけるべきではないか」と答えた⁽¹³⁹⁾ほどの積極性をもって神に思いを致した様子が、当初は見られない。ハイインリヒの場合は、なんとか治療法を見つけようと医者を訪ねて狂奔したのである。これが作者の「残念ながら」とする理由であろう。しかし、ほとんど実現不可能な治療法しかないと思われ、あきらめて農場にひきこもったハイインリヒは、その農夫に向けて回心の念を語っている。「世間の愚か者同様、私は、名譽

も富も神なしに持てるものと思っていた。愚かな想いに目をくらまされていたのだ。すべてを恵んでくださった神のことを、ちっとも考えなかった。」(三九七―四〇〇)つまり自分の力を過信する傲慢さと人間の力の限界に気付いたということである。そして、現在の悲惨な状況は「自分のせいではなかったことなのだ」(三八四)と自分の慢心に対する神の罰だと認めている。

この回心はヨブと似ているようで微妙に異なっている。ヨブの場合は自分の災いを自分の罪への罰とは認めない。神には幸いも災いも共に与える力があることを認めながら、現在の災いが自分の不正をただすためにくださったとは考えない。友人が悪を悔い改悛しろとすすめても「自分の正しいことを主張」しつづける。ついに神が「つむじ風の中からヨブに答え」世界の創造者としての業を語ったとき、ヨブは自分の無知と卑小さを身にしみて悟り、はじめて「みずから恨み、ちり灰の中で悔います」と述べる。しかしながら彼の言う悔い改めは自分の罪を認めたためではなく、神の壮大な全能性への理解不足を反省しることであると思われる。事実「ヨブ記」のはじめで述べられるように、ヨブの災いは、彼に罪があったからではなく、サタンがヨブの信仰を試そうと神の承認を得て仕組んだことだった。それゆえ神はヨブの友人を叱り、ヨブのふるまいを嘉して、病を癒し財産を二倍に増やして報いている。

しかしハイインリヒの場合は神の力に思いをいたさず神を顧みなかったことへの罰だと受けとめている。そのうえ自分がいかに浮世の快楽におぼれ欲望にしたがったかに言及し、悔いていけるようにみえる。地位も富も容貌も才能もそろっていたため

「すべての欲望を完全に充足させ」「浮世の喜びのみ追いかけて生きたものだ」と言う(三八三―三九二)。このことばは「なんの欠点も持たない」という最初のハインリヒの描写に矛盾するようであるが、放縦ではなくとも当時の若い騎士として美味な飲食やミンネ(恋愛)に禁欲的ではなかったと解釈することができる。ハインリヒはこうした生活が直接、神の怒りを招いたとは述べていないが、欲望を満たすことに熱心で、喜びをもたらずさまざまなものの源泉である神を思わなかった過去の生活を悔悟の念をもって思い起していると言える。

三

地上の楽しみに関する考えは、ハインリヒを救うために死のうと決心する娘のことばのなかでは、もっとはっきりした形をとる。彼女は「この世の生は魂を墮落させる」(六八八―六八九)だと言っていて、はやくこの世から去り天国に行きたいと願う。「この世の喜び」に身をまかせるのは「地獄に通じ」「神から離れる」ことだと主張する(六九〇―七三五)。この娘が両親に向けて語る言葉はまだ子供の娘が話すとも思われない「人間の能力を超えた賢い話ぶり」のようにみえたので、両親は「精霊が娘の口を通して語った」と考えた(八五五―八六九)。彼女の主張はこの世が無常で、たとえ結婚や財産で幸福を得るようになっても決して長続きしないから、完全な幸福が永遠に続く天国の神のもとに行く方が幸せだというものである。そのためハインリヒのために死んで自分の幸福を得ることができるのはまたとない機会だと述べる。「永遠の生のために若い

からだをささげることができるといふことから、神様に感謝したい。」(六〇八―六一〇)父母の言うことには従いたいが、自分が幸福になるのを妨げて欲しくないと言った(八二八―八三〇)。この娘の論理には疑問点がないでもない。本当に地上の生活がむなしなものならば、ハインリヒも治さずに死なせてやった方がよいのではないか。そしてまたハインリヒが死んだら農場から良い主人が失われて父母に災いが生ずるだろうから、それを防ぎたいと親への孝にも触れるのも矛盾である。「もしあの方を死なせたら、私たちは破滅です。みんなが安全なように、私がよい方法で助けようというのです。」(六二二―六二八)これは地上の生活はいずれにせよ不安定で幸福は長続きしないと主張に反して両親に生活の安定を確保することが良いことだと肯定するようにみえる。

しかし、作者は論理の一貫した主張を娘に語らせようとしたのではなく、若い娘の高揚した自己犠牲の志しとハインリヒへの淡い恋心と天上への憧れを描こうとしたと思われる。彼女の年齢も十歳か十一歳に設定されている。ハインリヒは娘に小さなアクセザリーなどを与え、戯れに「わたしの花嫁」と呼んで可愛がっていた。だから彼女が自分でも気付かない思慕の念を農場の主人である彼に対して抱くようになっていても不思議はなかった。ハインリヒのほうも病のおかげで他の人々から忌避される身で、こどもではあってもいやがらずにそばに寄ってきてくれるのがうれしかったので、できるだけ報いて彼女が離れていかないようにしていたのだろう。二人の関係はまったくの無私の思いやりというわけではなかったが、かといって利害で

結びついた利己的なだけでなく。娘が病人をいやがらずに世話をするのは「子供の心を動かす贈り物のせいであつたとはいえ」彼女の心の優しさのせいだったと述べられている(三四二―三四八)。こうしたハルトマンの現実的描述が、平面的な聖談や美談に終らないこの作品の文学的性格をつくりあげていると思われる。

このような状況で、自分のために死ぬという娘の申出を受けたハインリヒは感動したものの、精霊の働きだと考えた両親とは異なり、彼女の幼なさをよく承知していた。「お前は性急な子供みたいに行動する。思いついたことを、いいことでも悪いことでも、すぐやってしまつて、あとから後悔する」と言い、そのうえ、もしこのように過大な犠牲を受けて治療が失敗した場合の世間の批判も顧慮している。(九四〇―九五四)しかしながら父母に相談して彼らの意見に従うように指示したあと、事態がこれからどうなるかわからず「笑つて」しまつている(九六八―九七〇)。娘の決意をまじめに受取らずに笑つてすまそうとしたとも解釈できるが、困惑のため、つい笑つてしまふ心理的反応だったのかも知れない。

しかし、父母も娘に同意したことを知り、ハインリヒは自分に判断をまかされて「娘の願いを聞入れるべきか拒むべきか、なかなか決められず」悩まずにいられない(一〇〇四―一〇〇六)。そして、娘の熱意に押切られた面はあつたにせよ、涙ながらに彼女と共にサレルノの医者のもとへの出立を決意したのは、やはり病が治るかもしれないとの望みを捨てがたかつたからであろう。娘が申出なかつたら彼女を犠牲にすることを考え

もしなかつたであろう。しかし、熱心に乞われたときには、固く拒否することもしなかつた。娘の幼なさを指摘するおとなであつたはずのハインリヒも、思考力と判断力を充分活用させたとはいえない。そして結局は、娘を死なせて自分が治ることを望むという、自分の選択の究極の意味をよく見据えようとせず、涙にかすませて行為にはしつたのである。

四

娘の犠牲が自発的で自由意志からのものでなければ、治療は有効でないという設定は重要である。古来、処女の血や子供の血で難病を癒すという話は東西に多くある。残酷な領主や魔女のために犠牲にされたりされかかったりする無垢な乙女の物語は中世騎士物語にも語られている。しかし、この治療が長期的には効を奏さず、犠牲を求めた者が罰を受け、捕われ人が解放されるという結末で終るのが常道である。またこうした治療法を拒否して、その心を嘉した神の祝福で癒されるとの伝説もある。法王ジルヴェスターが、子供の血の犠牲をこぼんだ皇帝コンスタンティヌスを癒したと伝えられるものがそれである。ハルトマンの『哀れなハインリヒ』の題材もこうした教訓物語からとられていると思われるが、確実な原典の特定はできていない。しかし、このような伝説や説話のパターンをみると、乙女の側からの自発的な犠牲というのはかなり独特で、ハルトマンの独創ではないかと考えられる。たとえまったくの独創ではないとしても、彼がこの設定を選んだ意味は考慮されるべきであろう。

サレルノの医師は、血の提供者に少しでも心の迷いがあれば治療は成功しないとほつきり言っている(二二四―二二七および一〇六四―一〇八二)。そこでハインリヒはみずからすすんで自分に命をささげてくれるような者がいるはずがないと、すっかりあきらめてそのことについては一種の心の安定を得ていた。金銭や暴力で乙女をさがす道は最初からとざされていたのである。つまり作者は乙女の心臓の血による治療という気味の悪い題材をあつかっても、この作品の主人公が異常に残酷で自己中心的人物になる可能性を最初からとりのぞいていると言えるのではないだろうか。

しかし、見つかるはずがないような奇特な娘が現実存在して、熱心に犠牲を申出たとき、ハインリヒの心の安定はくずされる。あきらめていた快癒への望みがわきあがってきて、なにがなんでも断るといふ姿勢はとりきれなかった。もともと彼が治療を断念したのも、治療が不可能だという理由からであって、方法への倫理的嫌悪感からではなかった。というより、命と命を交換するようなやり方が正しいかどうか考える前に、考えても無駄だからと判断を保留、もしくは判断を停止したと言った方がいだろう。そしていま、病気を治させてくれと懇願する娘を前にして、ふたたび深く考えることをしなない。農夫夫婦の涙と娘のせつ々しくような願いに流されて、自分も泣いて娘を「哀れと」(一〇〇二)思いながらも犠牲を受入れてしまっている。ここでは彼が答をためらったのは、娘がかわいそうだからという理由からで、自分の行為の根本的性格まで熟考しているようには描かれていない。

こうしたハインリヒの態度はいかにも現実的である。いやがる乙女を捕えて血をしぼりとる残酷な悪人も現実にはいるかもしれないが、一般の読者や聴衆には縁遠い。また自己の選択と行為の正不正を倫理的論理的に考えつくしてつねに正しい判断をくだす聖人的善人にも、共感をもつことがむづかしい。そういう意味では、農場の娘が非現実的聖女ではなく、親切にしてもらった憎からぬ男性につくしたいという多少ともエキセントリックな高揚感を持つ思春期の少女として描かれているのもうなずかれる。冒頭に述べたように、外観は理想の騎士ややぐいまれなる美しさを持つ娘であっても、こうしたよくある性格を持つ、読者に似た人間の運命こそが、関心もよび実質的な教訓ともなるのである。

五

さてハインリヒの二回目の回心はいかにして起ったのだろうか。医者のもとで執刀室から閉出されたハインリヒは、医者がナイフを研ぐ音を聞き壁の隙間から少女が裸体で台の上に縛り付けられているのをのぞき見た。

「彼女の体はとても愛らしかった。彼は彼女をながめ、それから自分をながめた。すると新しい気持が湧いてきた。自分の考えていたことはよくなかったと思われ、とつぜん今までの望みがひっくりかえって新しい慈悲となった。」(二三三―二三五〇行)そして神の意志を無視して生きのびようと考えた自分の行為を恥じ「神のくだされ給うたことはなんであれ受けることにしよう。この少女の死は見たくない」(二二五四―二二五

六)と云って、医者に執刀の中止を申し入れる。

ハインリヒの心が変わったのが、少女の肉体に対する欲望のせいであったとは考えられない。「自分の考えていたことはよくなかったと思われ」たとあるからである。「自分の考えていたこと」とは少女を犠牲にして自分の健康をとりもどすことである。「今までの望み」も同じことだと思われる。彼は今まで自分が何をしようとしているのかが明確にはわかっていなかった。じっくり考えようとの努力もあまりしなかった。娘や娘の父母が泣きわめく中で自分も泣きながら、成行きでどういうわけか出立することになってしまったという状況だった。しかし、少女の「愛らしい」姿と病におかされた自分の醜い姿を見比べたとき自分の行為の意味をはっきり見せつけられたのである。彼のなそうとしていたことは、「いずれ死ぬ身なのに」「一日でも余計に生きのびよう」とあがくことだった。また、神から与えられた運命であるのに「受入れて耐えようとしなさい」不敬でもあった。そのうえ成功するかどうかもわからない手段で美しい少女を死なせることだった。それゆえこんなやり方で治療しようとは「自分が何をしようとしているのか本当には知っていないもののしわざといわなければならぬ」と悟るのである。(一四三三〜一四五三)

彼のなそうとしていたことは、少女の美しさと自分の醜い病身の交換だった。自分の姿をかえりみて、この体から病が去ったとしても、なにほどの価値があるかと考えずにはいられなかった。いつかはやってくる死を少し先に延ばすこと、つらくはあるが神の意志であると思われる病から逃れることが、少女の美

しさを破壊してまでも望むべき重要なことかと問うたのである。そのうえ必ず有効との保証もない医師の治療に貴い犠牲をささげる権利があるか疑った。ここにはじめてハインリヒはこうした治療を望む自分の根本的あやまりに気がついたと言えよう。そして、たとえ病が癒えてもとの体にもどれるとしても、そのためにこれほど美しいものをこわすのはしのびないと思つたのである。

「新しい慈悲」とは少女の苦痛や死に対する憐れみではない。「生きながら心臓を切り取られる」(一〇九二〜一〇九三)彼女が味わうであろうなみなみな苦しみを想像しての痛ましさは、最初から感じていたのだが、娘の固い決意を聞いて涙ながらに彼女をその運命にひきわたす覚悟をしていたのである。それゆえこの「慈悲」とは娘の意志や決心とは別の、彼女の存在そのものの価値に対する感情であつたと思われる。自分の哀れな存在と彼女の美しい存在は交換されるべきではないと考えるに到つた。

この娘は貴族の娘ではない。彼女と父母の生活は相当部分をハインリヒの存在に負っている。それゆえ娘も自分の身を犠牲にして父母の生活を保証したいと言っていた。ハインリヒは農場の生活における農夫と娘の奉仕に感謝してはいても、ある程度は、あたりまえのこととして受入れていた節がある。自己犠牲の申出も、彼に依存しない地位と身分の女性からのものだったなら承服しがたかったであろう。しかし、医師の家の壁の隙間から少女の姿を目にしたとき、彼は自分の存在価値を考え直し、自分のためにかくまで美しいものがこわされることを肯う

ことができないという、いままでとは異なる価値規準を抱くに到ったと言えるのではないだろうか。

それは人間は貴賤なく平等だという民主主義的思考とはちがう。ハルトマンもハインリヒも封建制の身分制度を無意味とみなしたり改革すべきと提案することはない。ハインリヒは物語の終りでこの娘を妻に迎えるが、この身分違いの結婚に関して親族と家臣に相談し、娘が自由身分だということ、また健康をとりもどしたのは彼女のおかげだということ、また健康を求めている(一四七五〜一五〇八)。ハインリヒの価値観はむしろ身分の違いを卑小と思わせる身分を超えた「愛らしいもの」による衝撃によって変えられたといえるのではないだろうか。ハインリヒが目にした少女の美しさは中世のキリスト教世界では、神の偉大さのあらわれと表現されるかもしれない。世界の創り手である神の創造の業の前では、人間の定めた貴族と農夫の相異がほとんど意味を持たなくなる、という意味での偉大さと全能性である。

六

先に触れたヨブへの神の答もこのことを言っていると思われる(三八一―四一章)。大地の基を据え海の水の境を定め雪雨雹を降らせ星の座を結ぶ業、獣や鳥それぞれにことなつた生き方と力を与え、河馬や鰐の恐るべき強さと美しさ(2)を形づくつた創造主の業が述べられる。こうした力と業を前にして人間は自己の力と存在がいかに小さいかを悟る。ヨブは自分の無実を確信していたがゆえに、神から自分にくだされた災いを妻や友人の

ように天罰とは考えられずに、理由を求めて神に問うた。しかし、神の答には彼が財産と子供を失ったわけも、恐ろしい病にかかったわけも説明されていない。サタンの挑発を受けヨブの信仰をためす試練であったと述べることもない。かえって、宇宙を形成し大小の動物に精妙な肉体と命を与えた創造の力を持つ者に対して、非をとなえ責を負わせるのかと問いかえしている(四〇章七―八節)。ヨブは、こうした神のことばに納得し、満足して問いをおさめている。自分の力と存在に比して圧倒的な神の力の大きさを知って、自分の不幸をめぐる問題の規模の小ささを悟り、全世界に占める自分の価値と役割の卑小に気づき、自分に関する「なぜ」という問いの無意味さに気付いたからであると考えられる。すべてを知りすべてをなすことができず神に対して、ほとんど何も知らず何もできない自分が、自分の運命に限っても理由を知ることの不可能と無意味を知ったからである(四二章一―六節)。

哀れなハインリヒには神の声による直接の答が与えられたわけではない。しかし、彼の二回目の回心の契機となつたのは、自分の不幸や病の不快の意味を軽減させる少女の美しさである。一回目の回心で彼はこの地上世界の喜び悲しみ、幸不幸が自分の力だけに左右されるのでないことを知った。世間から与えられるのが当然とみなしていた榮譽も称賛も日々の欲望を満たす楽しみも、一夜にして消し去る他の力があるのを知った。いくら努力しても越えがたい自力の限界と、強力な他の力の存在を思い知った。彼はキリスト教徒らしく自分を支配するこの他力を正義の神の力と信じて、世界を不条理の世とみなす虚無主義

的絶望には陥らなかった。しかし自分の傲慢に対する罰と解した不幸を背負い、世を去る時を待って隠忍の日を送るばかりであった。

農場の娘の申出によって、彼は病を癒してもとの生活にもどる機会が得られるかもしれないとの誘惑をきっぱり拒絶することができずに、犠牲を受け入れた。ところが娘の美しさを目にして、自分が享受する栄誉や欲望の充足とは異なる価値の存在に気づいたのである。神の創造界にはハインリヒの不幸にかかわりなく輝く素晴らしいものがあり、彼が自分のためにその輝きをくもらせることは神を蔑する自己中心的行為である。自分の喜びや悲しみのみにかまけていたハインリヒはここで、ひとつの絶対的価値の存在をあらわすものに出会ったと言えよう。この出会いの後ハインリヒにとって自分の病気や病気の治療はもはや第一の関心事ではなくなった。また治療せずに帰国したら人々から「嘲りや辱めを受けるであろう」と知っていたが、それも「神に委ねて」決意を変えず平静心を失わない境地に達したのである(一三四六〜一三五二)。

この美の衝撃はまた、地上の生活への再認識へも通じるはずである。ハインリヒは欲望を満たす喜びにおぼれた自分を悔い、娘は地上の幸福について「いちばん嬉しいことでも悲しみだし、甘い報いにもがいて悩み(七一〇〜七一〇)とまで言っていた。しかし、ユダヤ教から続くキリスト教の神観念において、神は全宇宙世界の創造主である。地球と動植物をはじめ、人間の喜びや悲しみのもととなるさまざまなる物がすべて神に創られ神の意志の支配のもとにあると考えられている。それゆえこの神

を崇める者は、世界外的超越存在である神の力に信をおくのであるが、もし天上にのみあこがれて神の創造物である地上世界を無意味とみなすならば、神の力に対する不敬に通じるといえるのではないだろうか。むしろ創造物を尊び、その壮大、精妙、美に感嘆することが、神への畏敬の念のあらわれであるとされてよいはずである。

神の創造物の美に驚嘆して、美の破壊を拒んだハインリヒに対して神は慈悲を示し、彼の病は医者の治療ではなく神の恩寵によって癒える。そしてハインリヒには以前以上の富や栄誉がもどり(一四三〇〜一四三二)、彼と娘はもはや地上の喜びを拒むことなく結婚して「幸せな長い生涯のうちに、二人は一緒に永遠の天に到った」と物語は結ばれる。「彼らの受けた報いを、我々すべてにも、神がさずけてくださいますように。」という作者の最後のことは、ハインリヒが数奇な運命をたどり特別な恩寵を受けた人物であったとしても、我々常人が彼とまったくちがう道をたどるわけではないことを示している。この物語の主人公ほど根本的な問いを人生に関して投げかける状況に陥る者は少ないかもしれないが、個々人だれでもが日々の生活の中で自分と世界のかかわりと生の意味を考える時がある。ハルトマン・フォン・アウエより七百年後の現代は臓器移植が可能となっている時代でもある。今日の人間にとっても『哀れなハインリヒ』の物語の主人公の苦悩と回心は、少しも現実性を失っていないと考える。

(一) 『哀れなハインリヒ』のテキストは Ernst Schwarz.

Hartmann von Aue, Gregorius, Der Arme Heinrich, 1967, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt による。邦訳は相良守峯訳、中島悠爾改変「哀れなハインリヒ」『ハルトマン作品集』(一九八二年 郁文堂)を参照した。

(2) アリストテレース『詩学』一三章等悲劇に関する叙述参照。

(3) 拙論「古代と近代における悲劇的なるもの」(『言語文化』二一号一九八四年)、「悲劇的あやまち ハマルティヤ」(『ペディアラヴィウム』三十一号一九九〇年)参照。

(4) 中世叙事詩は読まれることもあったろうが、聴衆の前で朗誦されることが多かった。

(5) 旧約聖書『ヨブ記』一、二章参照。(日本聖書協会一九五五年改訳使用)

(6) 『ヨブ記』三二章一、二節、三十八章一節、四二章一、六節等参照。

(7) 『ヨブ記』四一章十二節「わたしはこれが全身と、その著しい力とその美しい構造について、黙っていることはできない。」

(二橋大学教授)